

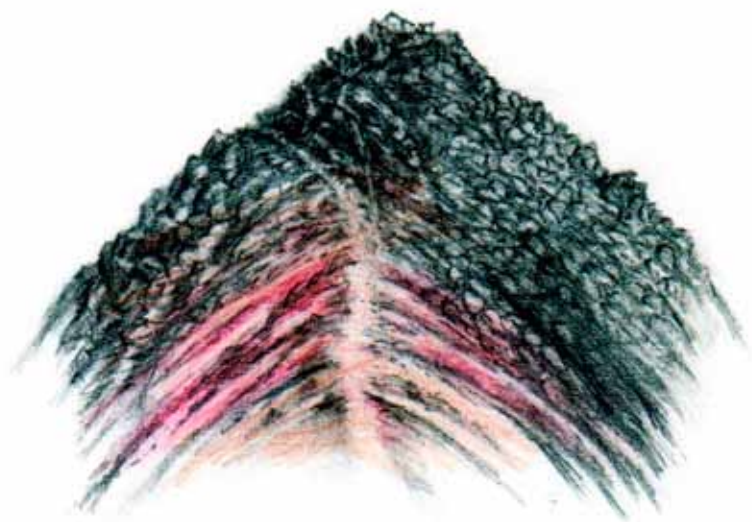
あを 10

2021



一本だけの庭木

山巡り 須賀忠男



乗鞍岳 3026m

岐阜と長野の境界線にある
3000m級の山なのに
手軽に登れるようになった
人気の山、
頂上に権神社が祀られている
霊山である。

十月集

さうだ

佐藤 竹僊

熊除の鉦と桴とが泉かな

潮浴をみてゐてさうだマスク取る

海と空同じ大きき浮袋

海といふおほいなる時龜がくる

初蟬やマスクを取りに戻りたる

颱風の逸れたる道にかなぶんぶん

ゆく秋や雨の降る日はよい天氣

銀木犀竹の帚のまがり癖

銀木犀マスク忘れて町歩く



クレヨン底力

大日向幸江

風の音眼で確かめし白秋の
色鳥の声降りそそぐ駅の道
熟寝子の汗しつとりとお食ひ初め
クレヨンの黄と青へらす長い夏
鰯雲お寺の窓をはみ出しぬ
冷蔵庫麦茶煎じる影を見る
夜の空港ポツンポツンと秋灯



夏から秋

七郎衛門吉保

遺言が「ほととぎす」選敗戦忌
敗戦忌コロナ・五輪に呆けたり
鶏頭花子花を連れてメダル受く
実山椒衣を剥いで嬰兒の瞳
温暖化夏雲黒に変わりけり
子に替り甚雨逗留夏休み
みんなの四十度に耐え鳴き初めり
輻射熱猿も手放す百日紅



ワイヤーカム

篠田純子

ワイヤーカムの影濃し灼くる競技場
炎天やワイヤーカムの追ひかくる
落蟬や三階五階外階段
みんなのきちり処暑より鳴かぬなり
鼠の巢石もて埋むる残暑かな
式部の実きみどり緑今朝の秋
植込みにマスク捨てある残暑かな



行間

篠田大佳

汗ばみて啜るがごとき咖喱かな
せせらぎを聴けど眠れぬ熱帯夜
秋近し厨にかをる胡麻油
今日は史書の行間秋の雲
少年は傘もて雨を濡れにけり



秋暑し

須賀敏子

金柑や三度真白き花咲かせ
ぐずぐずに朝顔伸びて花数多
風鈴や介護の車今朝も来て
遊郭のありし跡かも秋の蝶
アフガンの少女の涙花芙蓉
Tシャツの肌に馴染んで秋暑し
手作りの味噌届いたり秋兆す
テレワーク終はりゆっくり梨を剥く



夏痩せ

田中藤穂

夏痩せかするりと眼鏡卓に落つ
異変めく酔芙蓉はや咲き出でて
コロナ増えむしあつき日々五輪かな
むらさきの擬宝珠の花に蝶二つ
蟬の声ミンミンばかりなる異変
敗戦前夜一睡もせず明けしこと
終戦といふ記念日を子等は知らず



八月

長崎桂子

草いきれ家屋廃材堆し
茂りゆたかなりし厄介と不気味
ガラス窓半日を張付く蜥蜴
蝶は蜂の餌食となり痛ましき
八月の思ひ出艦載機の恐怖
羅の裾捌きゆったり雅
秋あつし草の葉に土ぼこり置く
木陰ふかし生き物集ふ秋日和

日に三度

森なほ子

日に三度仕事のやうに食べ晩夏
冷麦の白の透けるまで見詰め
冷麦の喉滑りゆく真昼かな
スナツプを効かせ命中豆の莢
一つづつ過去となるため花火揚る
涼しさや昼の寿司屋の開店前
耳鳴りにみんなは無し蟬時雨
落ちたるは蕾のやうに花木槿



○

赤座典子

秋の雨点滅の黄を煙らせて
ぬひぐるみ一つ増やして星月夜
存分にU S オープン夜は長し
B G M は「茶色の小瓶」芋洗ふ
子の誘ふ気分転換秋の湖



天の川

秋川泉

盂蘭盆会マスクの僧の読経かな
施餓鬼会や密は避けてと焼香す
ピーマンのわたごと炒め夫好み
伸びる穂にあつまる光荻の原
三毛放心餌に群がる蟻の列
立秋や三毛も何だかこざっぱり
コスモスや三毛ゆく家のポルシェかな
天の川阿弗利加象は眠りけり



烺收集

なに色の衿なのかと若き母

佐藤 竹僊

野生馬と日傘の人と都井岬

秋川 泉

貴婦人の白きドレスや岬馬

自転車の提灯の火や迎盆

爪に灯を点したやうな螢かな

大日向幸江

夏蝶の寄り道するや露天の湯

七郎衛門吉保

風受けて風を流して酔芙蓉

冷やし酒の瓶廻しけり七座句会

篠田 純子

蓮の葉のきみどりいろに裏がへる

空想の旅のはじめの曹達水

篠田 大佳



ワクチンを待つパイプ椅子梅雨晴間

須賀 敏子

小さき庭広き庭にも子のプール

女学校の師の顔浮かぶ濃あぢさゐ

田中 藤穂

塀の隙間を行来する蜂二匹

長崎 桂子

向日葵に子らに背丈を越されけり

森 なほ子

木も草も何か云ひたげ喜雨の中

端居して晩年の蜜甘きこと

連れ立ちてせせらぎを行く鴨の首

赤座 典子

大夕焼峰二つある坂戸山



家中に猫の爪あと家を捨つ

佐藤竹僊

「猫の爪あと」は象徴であり、「家族の思い出」が託されています。柱にはお子さん達の身長が刻まれ、床、壁、階段に、様々な家族の生活の痕跡があります。帰宅するとほつとする、家の匂いもあります。「家を捨つ」と言い切っても心は揺らぎます。

私は六回引越しましたが、全部借家（現在も）なので、淡々としたものでした。（純子）

人類のみなマスクして暑いです

佐藤竹僊

「です」で切れる俳句に関心があつて、以前調べたことがあります。現代ではインターネットのデータベースが豊かになってきて（俳誌のサロンもその一つです）、データベースから用例がいくつも出てきます。用例は本欄では割愛しますが、「です」を用いると一つには手紙のような文体を作ることができます。手紙の読者を想像することが古語より強く想像されて、個性が強い表現が強調されます。

掲句は人類という観点を詠んでいて、人間ならざる者へ手紙を送っているようです。文語を用いないことで、不可視の存在に言葉を奉るというより、気さくに話しかけている感覚であるようで、

作者の持つ世界観が心地よいです。（大佳）

ぶくぶくと出し巻卵梅雨に入る

赤座典子

だし巻き卵を作っているときのフライパンの上の卵液の気泡の様子を描いています。例えば、お弁当を持って出かけた気分を想像して、それが初夏から仲夏の雰囲気によく合いますが、気泡を潰すときのフライパンを叩く音と雨の音が連想されて、聴覚的にも映え合います。梅雨入りは丁度良い季節感です。（大佳）

ひなげしのぼつぼつ続く墓所の道

秋川 泉

「墓所の道」は何となく、整備が追いついていない、雑草が茂っている道を想像しました。獣道のように、人がめったに立ち入らない道よりは人の往来があるが、人気のまばらな道という印象です。ひなげしは別名虞美人草、「項羽と劉邦」の時代、戦いに敗れた項羽の愛人虞美人が自害し、その墓所に咲いた花に虞美人草の名がついたとのことです。ひなげしは墓地によく映え合い、死者との対話の穏やかなることを想像しました。（大佳）

父の日はいつもながらに雲空

大日向幸江

父の日と記念日として区切ってはみたものの、実際には特に感慨のないただの日曜日であることが多いものです。息子や娘の視線からすると、一回くらいなら目新しさもあるのですが、誕生日も

あるし、別居をしていれば贈り物の送り賃もかかるし、段々と祝い事とは疎遠になっていくものです。曇り空に付かず離れずな作者の気分が出ているように思います。(大佳)

赤潮を隠し八年首領の嘘

七郎衛門吉保

今月は社会詠の多かった作者ですが、その中でも、「嘘」に強く詩情を覚えました。嘘や秘密を貫き通すことは非常に大変なことです。当然、批判にも晒されますし、組織の中で正義を解する人物が秘密を抱えていれば、罪悪感を背負うことになります。嘘が公になったことで、組織に責任は発生しますが、同時に「声のない正義」はある種の解放感に包まれたのではないかと思います。明るみになるまでの八年という長さに組織の葛藤が実感されます。

素材は、どの事案なのが気になりますが、おそらく諫早湾の開門の話ではないかと想像しました。(大佳)

解体作業員の老若多国籍暑し

篠田純子

老若男女と言わないところより、解体作業員には女性が鮮ないようです。老いも若きも多国籍でも、筋肉質で汗くさい男の体臭を想像しました。多様性のようでモノタイプな人間の集団に、作者はうんざりしているようで、作者の感想は「暑し」という季語に集約されています。(大佳)

四葩濃しコロナに変異の隠し技

四葩は咲いてから時間の経過とともに花の色を変えることで知られてゐる。また、海外にわたり装ひを新たに日本に戻ってきて愉しまれてゐる。

この句の四葩は薄い色から今まさに濃い色で咲き誇ってゐる。コロナウイルスも武漢からはじまり世界各地にわたり変異株として地球を席卷してゐる。意図のある生き物のやうである。隠し技で強化されたコロナウイルスと「濃し」が面白く対応してゐる。(喜孝)

夕焼けて長蔵小屋のラヂオかな

篠田大佳

ノスタルジックで、心がしっとりとする句です。森林浴や、沼巡りでオゾンを沢山浴びて、きつと夜はアルファ波で、脳内は満たされたことでしょう。燕の巣が小屋の軒に、沢山かかっていたのを、思い出しました。再び訪れてみたい尾瀬です。(純子)

夕焼けて長蔵小屋のラヂオかな

長蔵小屋と聞いて初めて行った山歩きを懐かしく思ひ出した。長蔵小屋の詳細は頭からきれいにクリアされてしまったが、なつかしさがよみがへる。洋燈を珍しく眺めたものだ。夕焼の山小屋、夕食が済めば明日のために寝につくだけだ。

この句の魅力は「ラヂオ」といふ表記。「ラジオ」ではいくらかの減点になる。こんなやうにおもふのは私だけかもしれない。(喜孝)

妹はゆっくり話す文字摺草

須賀敏子

助詞の使い方で、「作者は早口なのかしら」と想像が膨らみます。「文字摺草」は振花のことで、夏の季節感とともに、姉妹のねじれの関係の想像を補強してくれます。「長短」のような間柄を想像して、微笑ましい関係性に思えます。(大佳)

おそろしき今年の木々の茂りなり

田中藤穂

文学の考察で、「異界」というキーワードを見かけることがあります。毎年見慣れているはずの茂りが今年は何故か違和感がある。その違和感が異界への入口、境界を感じているかのような、非日常を直観している作者の心持ちを読みます。(大佳)

朝陽さし今日もまた蜂はうろつく

長崎桂子

晴耕雨読の日々を過ごす作者です。この句は蜂がもう少し元気な時期なので、春から初夏の間くらの時期の句でしょうか。朝陽の鮮やかさと活動的な蜂の不穏さが取り合わせられています。活発な蜂が街の無法者のようで、おかしみがあります。(大佳)

リーダーのつひに捉へし雷神

森なほ子

気象リーダーで雷の発生地点を表示する情報を天気予報でよく見かけます。今年の梅雨時には雷がよく鳴りました。「雷神」を捉えるとなると、科学で説明される落雷現象ではなく、雷を落とす雷神様を軍事リーダーがやっと捉えたような心持ちがします。怒りに燃える雷神様と交渉をして、回答如何では雷神様を拘束して、雷を自在に操る人間の傲りを描くファンタジーのような世界観を想像してしまいました。(大佳)

大学の隣に 篠田大佳

大学生の時、キャンパスの隣に開業医の診療所兼自宅がありました。大先生が大往生を遂げて、玄関には大先生の名前が大きく書かれた表札が掛かっていました。卒業するまでそのままだったと記憶しています。現在、その医院は廃業したようです。

表札

1



佐藤 喜孝

秋川 泉

大向日葵内科医の庭一面に
谷根千のたずねる先は夕薄暑
ひと気無き山寺に棲む墓

○行きずりの庭一面に大向日葵が咲いてゐた、となればホッと驚きをもつて読める。が「内科医」と断ると様子が違ってくる。場景から叙事に傾いてしまふ。素直に庭一面の向日葵と読めなくなる。正確に書いたために詩情を失った。

○この句は前句と違ひ事柄の正確さを欠いてゐる。たずねる先はお店ではなく「夕薄暑」。なんとも趣のある作品である。

○俳句は省略と云はれるが、ただ省けば済むといふものではない。がこの句の「ひと気無き」は省いてはどうか。山寺が賑やかだったならそのことを述べてもよいが、山寺はもととさう云ふ所にある、といふイメージである。

大日向幸江

底力を出して夏草始末する
白日傘入道雲にとけ込みぬ
渡し舟梅雨前線横切りぬ

○「底力」の「を」は省く。「を」があると力が抜ける。夏草に立ち向かふ頑張り屋の作者の底力である。

○この句の季がさなりは気になる。「丘の上の雲に溶け込む白日傘」。これを参考に幸江世界を作ってください。

○私にはすこし難しかった。渡し舟は川の此岸から彼岸へ人や物を渡すもの。渡し舟が横切るものは川である。しかし掲句は梅雨前線を横切る。幸江さんの詩想に思ひ至らぬのは残念である。

七郎衛門吉保

人選に酷暑の見えし五輪かな
二百五のマスクも競ふ夏五輪
爽快が不快をフオール夏五輪

○句の下敷きにあるニュースを私は知らないやうだ。「酷暑の見えし」で選手選考の難しさを伝え
たかったのではと思ふ。

○吉保さんは五輪を詳しくご覧なられたやうだ。困ったときのネット頼み。「五輪」205」で
検索。東京五輪は二百五ヶ国の参加があったと知る。開会式の風景であらう。今回のコロナ下の特
異な五輪を様々な色や形のマスクを通じて表現された。おもしろい視点。

○東京五輪の無事に終ったことをレスリングの決まり手「フオール」をもって表現。「夏五輪」は
何となく詰めすぎて苦しい。「コロナ五輪」と直截に。または「夏の五輪」と頭に置くのも一法。

篠田 大佳

街路樹は伐られ桜色の暑し
しちぐわつや目の脅えたるアナウンサー
S P が酒屋の前を見張る夏

○枝おろしでは無ささう。街路樹そのものが何かの理由で伐採されたやうだ。その切株の生きてい
る証の桜色を暑しと思った。暑しは色の表現であり作者の心の表現でもある。

○ニュースを読むアナウンサー。言葉のつまるやうな悲惨なニュースも表面上淡々と読み進む。し
かし作者はそのアナウンサーの目に脅えを見た。「しちぐわつや」が個人の思いにとどまり解放さ
れてぬないのではと危惧した。

○S Pといふ略語はいろいろな意味に使はれる。私のS Pは古いレコード盤、ほとんど死語である。
掲句のS Pは要人警護の謂。昔某国の首脳と我が国の首脳が居酒屋へ行ったことがニュースになっ
た。この句はそんな昔の事では無ささう。酒を売って居る店の前に待機するS P。どんな状況なの
だらう。

須賀 敏子

虫集ふ金柑の花緒にきざみけり
黄金虫ブルーベリーの実を好み
虫喰ひの紫蘇も一緒にきざみけり

○金柑の花が白いのはみなが知つてゐる。そこを「真白なり」といふのはそのことを強調したい、またはその真白さに改めて感動したからである。

○ブルーベリーの深い青に黄金虫の色の取り合せがおもしろい。実際のコガネ虫は青色が主だとか。カナブンは多様な色をしてゐる。茶色もある。カナブンはさうではないがコガネ虫は植物にとつて害虫ださうだ。下五は云ひ過ぎた。

○実体験の強さ、おもしろさが前二句とは違ひこの句はある。自栽の紫蘇の葉であることも分かるし農薬に比べたら虫喰ひなどへイチャラと云ふ生活態度が伺へた。

田中藤穂

大椎の老化ありあり梅雨の寺
思ひ出の中だけの実家盆提灯
二回目のコロナの注射梅雨の中

○どんな老樹の様子から老化と知つたのだらう。梅雨時の椎はあとからあとから若葉が湧いてくるやうな勢いだ。老化の様子をありありと読者に伝はるとなほよい。

○盆提灯を点す。提灯の明りの中に様々なことが浮かぶ。もうすでに無い実家のことをも、そこに

一緒に暮らした人々も今はない。ルビがないが、「じつか」と読むより「いえ」または「さと」と読みたい。

○ワクチンを打った人の率が選挙の投票率より高いと云ふのには驚いた。比べるものではないが、いかにワクチン接種に協力したかが知ることができた。私も二回ちゃんと接種しグッドピープルになれた。

八月号のこの欄で「句友来て楽しき・今日や百合ひらく」を「楽しき・今日や」と誤入力してしまった。この句への鑑賞文を読み返してみた。全く誤入力に気が付かず鑑賞してゐる。二重の粗忽者だ。

長崎桂子

ワクチン終へやや安心の七月
羽小刻み庭とび廻る黒揚羽
向日葵の畑や精気を満喫す

○ワクチンを打ったからと云つて安んじるわけではないが「やや安心」である。ワクチンを打たれた方皆同じおもひであらう。

○黒揚羽の飛び様を正確に表現されてゐる。確かにホバリングではないが花に止まる時などこのや

うな記憶がある。よく観察された作品。

○一本でも向日葵の姿は雄々しい。それは畠を成してゐる。向日葵の「精気を満喫」する姿勢は桂子さんの健康の源だ。

森なほ子

しやぼん玉大切に吹く昔の子
しやぼん玉大量生産する玩具
湯上りを団扇頼みの日々ありき

○今と昔を比べての回想。確かに昔は一つ一つ大切に大きく膨らました。いまは連射や大きなシャボン玉を苦もなく作れる。そのことを味気なく思はれるか、肯ふかなほ子さんは述べてをられない。これも一つの句づくりの姿。

○これも回想。いまでは扇風機だ、クーラーだと湯ぼてりの体を冷ますことができるが、かつては団扇頼みといふ。浴衣の胸元をひろげて団扇を使ふ。艶な風情である。扇子では味気ない、団扇の出番だ。

赤座典子

涼風や苔むす仏笑まひゐて
湯沢七月熊出現と広報車
屈託無き空の青さにサングラス

○落ち着いた作風。私生活の安定感を思ふ。

○湯の町湯沢。自然の真ただ中に町があると改めて知る。都会にも大自然にもどこにでも危険が存在すると云ふことか。

○「青さに」を「青さよ」「青さや」と迷はれたと脇に書いてある。私は「青さや」に一票。どなたでも助詞の一字に迷ひに迷ふものだ。一度これと決めても数日後には揺らいでゐる。困ったものだ。ここまで書いてきて「青さよ」も「青さや」より新鮮味があり良いかなと迷ひ始めた。

(以上 九月号掲載分です)

表札

2

万太郎

田中藤穂

小学三年生の時、東京一古いと書かれた私の学校は花見寺の跡に新築された。今まで三分でゆけたのに教室まで六分かかるようになったが日暮里諏訪神社の鳥居の前に久保田万太郎さんが住んでいたの、毎日その前を行き来するようになった。万太郎家の木の門はいつも閉まっていた、たまに門が開いて座敷に電灯が灯っていることがあった。句会でもあったのか。さてその表札、木の表札に「久保田」と書かれていたが、子供心に立派な美しい字だったと何故か心に残っている。

今風

長崎桂子

結婚をした折に業者をお願いし木製に毛筆で名字だけを縦書したのを四十年余使用していたが、塀を直した折に建設業の方の「今風の変えたら」とのお言葉で、名字を横書したのを今は取り付けて居ります。



仁王

森なほ子

散歩の途中。古びた塀と鬱蒼とした樹木が伸びていて長年の空家のようだった。その表札に黒々と「仁王」とあった。この姓女性には一寸お気の毒だと思った。それから何度か通る度、ひっそり「仁王」を見上げた。ところが散歩コースが変わり、数ヶ月ぶりにその前を、との笹が、その家が無い。通り過ぎたかと思ったが、どこにも無い。あの生い茂った樹木も。今は新しい家が建っている。「仁王」さんの末裔はどこにいらっしゃるのだろうか。

表札も個人情報

秋川 泉

美しい素晴らしい書体の表札を稀に見る。それは家の主の人格を表しているように思われ、私は懂れる。しかし、現代は表札を出さない、名前を尋ねることも憚られると云う時代になった。さまざま考えも及ばない犯罪が増えた為か。個人情報保護法で、全ての情報が外に出る事を守るためか。それなのに国家は、個人をより深く知りがっている。

帽子

父の香の失せぬ形見の冬帽子
美術展同じ帽子の人と遇ふ
テンションを上げばや豹柄冬帽子
天望ランチ日差に温む冬帽子
雑踏に見失ひたる冬帽子
点滴の夢安らなれ冬帽子
歩かねば老いるばかりぞ夏帽子
夏帽子少女のやうなお母さん
別れしな母鬘と夏帽子
母子地藏揃ひの赤き冬帽子
山よりもデモに参加と夏帽子
藍浴衣解いて帽子とワンピース
頂上に坐す地藏尊冬帽子
冬帽子似合つてをりぬ猫駅長
袴に夏帽子なりちんどん屋
帽子脱げば寒の青空かぶさりく
同い年位の男冬帽子
葱の花の帽子のボンボンにする
庭手入れ汗ばむシャツや帽子まで
帽子みなゆるくて夏を老いにけり
妃殿下の墓前に傳く冬帽子
あつたかさう誰が失くせし冬帽子

木村茂登子
田中 藤穂
篠田 純子
赤座 典子
竹内 弘子
斉藤 裕子
早崎 泰江
赤座 典子
赤座 裕子
須賀 敏子
須賀 敏子
井上 石動
大日向幸江
篠田 純子
定梶じよう
中川句寿夫
森 理和
黒澤 佳子
田中 藤穂
大日向幸江
定梶じよう

母親似目尻きりりと冬帽子
春一番芥と帽子に悲鳴とぶ
被災地の若き語り部春帽子
料峭や帽子にマスク行帰り
夏帽子足元よりの照り返し
summer・sale・帽子店から案内状
夏帽子拾ひてよりのお付き合
秋めきて帽子を少し重くして
入学の帽子のあみだ正さるる
振り返し綿帽子のごと春雪
帽子とりコスモス越しに道をきく
帽子とび路傍を乱す厳冬来
房州
房州団扇祖母の笑顔を思ひ出す
房州の波の白さや野水仙
ホース
花どくだみ移動入浴車のホース
飛魚に太きホースの真水掛く
雛芥子にホースの水を弱めたり
八月十五日ホースで表に水を撒き
ゴムホース溢れ出る水チューリップ
坊主
ゐのししや三日坊主の初日記

田中 藤穂
長崎 桂子
七郎衛門吉保
長崎 桂子
石森 理和
石森 理和
大日向幸江
七郎衛門吉保
定梶じよう
長崎 桂子
田中 藤穂
長崎 桂子
森 理和
須賀 敏子
竹内 弘子
佐藤 喜孝
早崎 泰江
鈴木多枝子
大日向幸江
芝 尚子

海老蔵の坊主頭の涼しさよ
落葉掃坊主頭の竹箒
坊主バーに仏壇ふたつ秋暑し
坊主バーの虚無僧体験儼にほふ
長梅雨にやんちゃ坊主の草も木も

ポーズ

月の酒半跏思惟のポーズして
梅雨ふかし鳥賊のポーズをしてみるか
囀や順にポーズの車椅子

宝石

ビル風宝石覗く時に吹く

放送

深夜放送ライン河畔の連翹説く
迷ひ子の放送のあり初詣
元日や車内放送変りなし
莖立や放送禁止用語集
玉音放送意味分らずに炎天下
上げ汐の注意放送からす麦
高校の始業放送九月かな
父の忍母の慈玉音放送きく
ナイターや放送席はおしづかに
こまごまと構内放送秋暑し

包装

竹内 弘子
東 亜 未
篠田 純子
篠田 純子
七郎衛門吉保
篠田 純子
佐藤 喜孝
赤座 典子
定梶じよう
松本 米子
吉成美代子
山莊 慶子
佐藤 喜孝
鈴木多枝子
田中 藤穂
大日向幸江
田中 藤穂
篠田 大佳
森 なほ子

穂の芽や包む虎屋の包装紙
房総
房総の海が煙りて菜種梅雨
房総の巖峨山総て水仙花
初旅は身内の集ふ房総へ
房総の潮風かかる蓬摘
房総の真ん中は山春の昼
房総の陽のあつまりて水仙花
房総に幾万の房金魚草

包丁

数へ日の今日包丁を研ぐときめ
しぐるるや包丁を研ぐ昼下り
春昼の手打ち蕎麦屋の大包丁
包丁研ぐすわつと切れし熟れトマト
夏の朝あのある増えて包丁研ぐ
包丁の切れの悪さや花疲れ
夏めきし包丁の音夕明り
えんまこほろぎ包丁がなまくらで
秋の風陳列棚に石包丁
月陰に影となりたり包丁研ぎの
桃を買ふ包丁たたぬ未熟桃

定梶じよう
栢森 定男
須賀 敏子
赤座 典子
鈴木多枝子
須賀 敏子
須賀 敏子
七郎衛門吉保
後藤 志づ
赤座 典子
吉成美代子
齊藤 裕子
齊藤 裕子
赤座 典子
東 亜 未
定梶じよう
竹内 弘子
大日向幸江
大日向幸江

あとがき

短文のお題「私のお雑煮・我家のお雑煮」

私、年越蕎麦と雑煮は好きだがこうあらねばといふ拘りはない。母の雑煮はどんなものだったか印象がない。といふことなのか妻の雑煮を躊躇ひなくいただいた。女性は嫁ぎ先の味にするのか、実家の味にするのか初お正月は戸惑はれるかもしれないと思った。

下石神井日録

先月のあとはきは誤植だらけであった。引越した時間が出来ると思ってゐたが、さにあらずかえって雑用に負はれてゐる。銀行の住所変更一つとっても顔写真付きの身分証明書がある。本人より身分証明書の方が大切なのかと言ひたくなる。が長いものに巻かれてでマイナンバーカードを作らなければならぬ。どこかで写真を撮らなければ、撮る前に床屋さんを探さなければと問題が増えてくる。

悪い事ばかりではない。大きなゴミ捨ての日には娘

が来て棄ててくれた。孫ともより親密になった。電柱を五本ばかり行くと大きなスーパーがある。そのスーパーの途中には金木屋が咲いてゐる。そしてよくみると金木屋の隣に銀木屋が。この匂ひがどっちの木犀なのだらうか迷ふ。きのふは風邪ぎみで一日大事を取った。今日は三十一日あせつてゐる。表紙の写真は散歩の途中で買ったコキア。今は根の方まで赤くなって淋しくたつてゐる。
(喜孝)

二〇二二年十月号

発行日 十月三十一日
発行所 〒177-0042

東京都練馬区下石神井一丁目六の三
電話 090 9828 4244
印刷・製本・レイアウト サンハイツ石神井Ⅱ 一階

カット／須賀忠男・福井美佐子・ティリ エイマ 竹僊房
会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年
ゆうちょ銀行(普) (店番018) 4586402
佐藤 喜孝(サトウ ヨシタカ)